ISSN 1883-9924

甲南英文学

No. 28 2013

甲南英文学会

ISSN 1883-9924

甲南英文学

甲南英文学会

編集委員
(五十音順、＊印は編集委員長)
秋元孝文　有村兼彬　中谷健太郎　＊福島彰利

目 次

追悼 荒木一雄先生――荒木先生と甲南・・・・・・・ 有村 兼彬 i

―― 論文 ――

破り捨てられた Mark Twain の恋文・・・・・・・・・・ 和栗 了 1

PP 主語の派生とラベル・・・・・・・・・・・・・・・・ 古川 武史 17

On the Absence of Processes in Non-finite Clauses ・・・・ Kazukuni Sado 33

―― 研究ノート ――

Henry James のプライバシーとパブリシティー ・・・ 中井 誠一 57

20 世紀アメリカ小説にみる同時代貨幣制度との共振・・ 秋元 孝文 63

Sounds familiar, looks familiar— Examining the Linguistic Correlates of the 'Other Race Effect'・・・・・・・・・・ Nigel Duffield 67

追悼 荒木一雄先生 – 荒木先生と甲南

有 村 兼 彬

今年1月17日顧問の荒木一雄先生が亡くなられた。享年満91歳であった。

先生は1969年に大阪市立大学から名古屋大学に移られ、1985年名古屋大学を退職されて甲南大学の教授になられた。当時の定年が65才だった甲南での在職期間は結局2年間だけであったが、その後、相愛大学、京都外国語大学の教授を勤められた。しかし、先生と甲南の関係は上記の記述が示す以上に深く、1955年に先生が鳥取大学から大阪市立大学に移られた後、恐らくはすでに甲南大学教授であられた恩師大塚高信先生が誘われたと思われるが、先生は甲南大学で非常勤講師として英作文や講読などの科目を担当されたようである。ということは、先生は英文科設立からそれほど経っていない頃からずっと甲南と関わっておられたわけで、よく「自分は多くの専任の教員より甲南のことをよく知っている」と口にされたものだった。また、わが甲南英文学会との関係では、1984年12月に設立総会を開いた時に記念講演をして頂き、さらに学会の顧問をお願いしたところ喜んで承諾して頂いた。

私は先生が名古屋大学に移られた次の年1970年に甲南大学大学院に入学したのだが、その年から先生は甲南でも大学院の授業を担当されるようになった。その年の講義内容は生成文法概論だった。高校の

教員を辞めて大学院に入った私にとれば、先生の話の一言一言が新鮮だった。授業後の雑談は研究のこと、出版のこと、学会のことなどが中心で、先生の話を聞いていると、何となくその世界が身近に感じられたものだった。雑談の中で著名な研究者が話題になることが度々あったが、このような人であっても先生にかかると皆「君」呼びだった。これもまた驚きだった。その年、授業に出席していた英語学の院生は当時博士課程在籍中だった田中紀男氏（天理大学名誉教授）と私だったのだが、私達は甲南大学大学院における栄誉ある最初の教え子となった。それから 42 年もの間折に触れて先生のお人柄に接し、厳しくも暖かい指導を受けることができたことは私達にとって僥倖とも言える幸運であった。

1972 年の 4 月だったが、名古屋大学の学部長の責務から解放された先生は土曜日の授業の後で読書会を開こうと提案された。当初のメンバーは、鳥取大学、大阪市立大学、名古屋大学における教え子の方々 3 名と当時の英文の若手であった枡矢好弘氏（甲南大学名誉教授）、天理大学に着任されたばかりの田中紀男氏、当時の院生であった岩田良治氏（天理大学教授）を交えた都合 8 名であった。設立時から今日に至るまでの間の参加者は甲南大学大学院生及び卒業生、名古屋大学で荒木先生の教えを受けて関西に在住しておられる方々が中心だが、メンバーの友達も加わって多い時には 10 名を超える時期もあった。最初のテキストは Chomsky の *Aspects of the Theory of Syntax* であったが、これまで読んだ論文は数えきれない程の数にのぼる。なかでも強く印象に残っているのは John Robert Ross と Tanya Reinhart の博士論文であり、Chomsky の *Lectures on Government and Binding* だった。皆わくわくして勉強した。ただし、いつも様々な仕事を抱えておられた先生が *Aspects* を終えた後も読書会に出ておられたかどうか記憶は定

かでないが、この会は荒木先生が甲南を退職されてからも姿を変えながら今日でも続いているから、その歴史は40年を超えることになる。

荒木先生は、1985 年甲南大学教授として着任された時多くのプロジェクトを心に描いておられて、その中の1つとして研究会の設立があった。先生は「自分は大塚先生がお作りになった大阪英語学研究会に参加することによって多くを学ぶ機会に恵まれ、今の自分があるのはそれに負うところが大きい。その恩返しの意味も込めて、同じような機会を関西の研究者に提供する場を作りたい」と言われた。つまり先生は様々な分野に関する研究発表を聞くことによって研究の幅が広がると言われ、これを「耳学問」と称せられた。先生の命名による「関西英語学研究会」(Kansai English Linguistics Circle) という名称のもとに早速趣意書を作り、土曜日の読書会のメンバーを初めとして、50 名ばかりの人々に送った。最初の会合は甲南大学の会議室で開かれたが、参加者は 30 名程にのぼった。そこでは学閥にとらわれない自由な人の交歓があった。つまり、先生と直接間接に繋がりのある人達のみならず、会員の友人が随時参加する極めて自由な研究会であった。この会はいつしか KELC（ケルク）という愛称で知られるようになった。開催は年 6 回程で、毎回 2 本の発表があり、その内容は統語論、意味論、語用論、音韻論・音声学に加えて英語教育、言語習得、英語史研究など多様であった。これこそが荒木先生が目指しておられた「耳学問」を具現化したものであった。しかし、残念なことに 1995 年以降参加者が漸次減少し、1 回の参加者が 6、7 名ということも珍しくなくなった。この事情を先生にお話したところ、先生の名の下に設立の主旨を再度確認して皆さんに積極的な参加を呼びかけることになり、私がその文書を作って郵送した。しかし、退潮の勢いには棹さすことができず、大阪大学を中心とした KATL との合併話など紆余

曲折を経て、ついに2000年初めの会合を最後に活動は収束したのであった。KATLも同じ時期に活動を停止したのは偶然でなく、研究スタイルにおける時代の変化を反映していたのかも知れないが、15年程の KELC の活動を通してわれわれ会員が得たものは測り知れないものがあり、それは各人の中で確実に成長しているはずである。

こうして荒木先生と甲南大学の繋がりについて書きながら、先生が甲南に残された財産がいかに大きいか、そして先生の教えを受けた20名にも達しようとする英語学徒がいかに幸せであったかと思わざるを得ない。今こうして荒木先生を思い出すと、先生はいつもにこやかで、難しい顔をして目を吊り上げておられる姿など見たことがない。私が駆け出しの頃のことだが、論文を書いていて内容に自信を持てなかったので、先生に電話して話を聞いてもらったことがある。自分が考えていることを一通り喋った後で、何となく無意味なことに拘っているような気がしてならず、「こんなことを書いて意味があるのでしょうか」と言った。今から考えると、言ってしまったと言うべき愚かな問いであった。それに対して、先生は（正確な文言を覚えているわけではないが）、論文には上手下手はあるだろうが、人が書く論文のことを意味があるとか、意味がないとか言えない、人間一人一人が生きることに意義があるのと同じように論文を書くということに意義があるわけで、それに向けての努力こそが大切なのだと言われた。その話を聞いて、それまで一人悶々としていた思いが晴れたのを覚えている。先生はまた、人の能力の違いなど知れたもので、研究上最も大切なことは考える力なのだと言われた。この言葉も励みになった。例えば難解な論文を読んでいる時に、その難しい議論が理解できず、つい投げ出したくなることがしばしばあったが、そのような時に先生のこの言葉を思い出して、「徹底的に考えれば分からないはずがない」

と思い直し、再挑戦したことがあった。このように、先生の話を聞いているといつも「自分も頑張ればできるかも知れない」という気にさせられるのだった。

今ではもう私も私が最もよく指導を受けた時期の荒木先生の年を越える年になっているのだが、日々若い人達と接しているなかで、果たして彼らにやる気を起こさせる言い方をしているのだろうか、あるいは励みとなるような言い方ができているのであろうかと自らを反省することしきりである。先生が亡くなられた今でも、何か問題に直面した時に、ふと荒木先生だったらこういう時はどうされたであろうか、どのような言葉をかけられたであろうかと思う。まさしく私にとれば荒木先生は学問の師であると同時に人生の師でもあったし、これからもまたそうあり続けるだろう。

破り捨てられた Mark Twain の恋文*

和栗　了

SYNOPSIS

Mark Twain's Torn-Away Love Letters

Ryo WAGURI

Before his Marriage Mark Twain sent 184 love letters to Olivia Langdon, but several letters of them were intentionally torn away. This essay discusses Twain's purifying intention of his courtships and himself, focusing on his early love letters. On his seventh letter, he wrote "our projected & expected engagement was not yet consummated" and suggested their intimate relationships. Twain divided the pages of his love letters into two parts, open to Olivia's family and exclusively confident to Olivia. In the former pages Twain expressed his desire to be a Christian under the guide of Olivia, a pure and perfect woman, and in the latter he revealed his sexual desire, through which Twain made himself the welcomed husband to Olivia's family and consequently he became one of the most popular literary man in America.

Mark Twain (本名 Samuel Langhorne Clemens, 1835-1910)が、Olivia Louise Langdon (1845-1904)、後の Olivia L. Clemens に書いた手紙は Clemens 家の宝物として大切に保管されていた。特に二人が文通をし始めた 1868 年 9 月 7 日（と 8 日）付書簡から二人が結婚する 1870

年2月2日までの17ヶ月間にTwainが書いた手紙は、Oliviaによって封筒に通し番号がつけられ、彼女が大切に保管していた。

Twainは結婚後も旅行先からOlivia宛にたくさんの手紙を書いた。また彼は自らの死の直前まで彼女を崇拝する言葉を記し、『自伝』(*Autobiography of Mark Twain*)の中に残している。[1] 出版された作品の中でOliviaを直接に題材にしたと考えられるものは短編の"McWilliams"三部作くらいしかないが、[2] Twainは出会ってからずっとOliviaに対して愛情と崇拝を書き続けた。その中心になっているのが結婚前に書いた184通の手紙である。この論文ではこれを恋文として取り上げる。

上に述べたことと矛盾するようだが、宝物のような恋文の一部が欠けている。しかもどうやら意図的欠損のようなのだ。誰が、どのような意図でこの宝物を棄損したのか、推定したい。それによりOliviaとTwainとの関係に新たな解釈を試みる。

1

Twainの恋文は生前から家族とその周辺の人々の中では有名だった。その分量もさることながら、"I love you, Livy"と繰り返される熱烈な愛情表現でも知られていた。例えば、長女Susy Clemens(Olivia Susan Clemens, 1872-1896)が10歳の時にそれらを読みたいともとめたが、母親Oliviaは、Nathaniel Hawthorneの恋文よりもはるかに素晴らしい恋文だけれどもあなたにはまだ早いわ、と断ったという。[3]

妻の実家Langdon家およびTwainの家族とその周辺の人々の中では、結婚以前にTwainがOliviaに熱烈な手紙を書いたこと、そしてOliviaがTwainを導いてキリスト教徒にしたことなどが家庭内で語り継がれていた。伝説化していたのである。この二人の恋愛伝説の中核をな

す文書が 184 通の恋文だったと言ってよい。

その伝説的恋文の一部が欠けている。[4] 手紙の一部を消失させたのは、疑いもなく Olivia である。その理由を探る。

その本文が何も現存しない手紙、1868 年 10 月 4 日（と 5 日）付、通し番号 3 通目の手紙をまず取り上げる。この手紙にも熱烈な愛情表現が記されていたと推測されるが、今は 13 行ほどの追伸が残るだけである。最も大胆に削除された恋文と考えられる。以下の関連年表にそってこの時期の状況をまず確認する。

Twain 恋文関連年表

1868 年 8 月 21 日から 9 月 8 日まで	New York 州 Elmira の Langdon 家に滞在。 Fairbanks 家を訪問するために、Charles Langdon と共に 8 日朝に Elmira から Cleveland にむかう。
9 月 7 日と 8 日	Olivia 宛 1 通目の恋文書く。発信地 New York 州 Elmira、宛名書きは“My Honored ‘Sister’”。
9 月 21 日	Olivia 宛 2 通目の恋文書く。発信地 Missouri 州 St. Louis、宛名書きは“My Honored Sister”。
9 月 24 日	Mary Mason Fairbanks 宛の手紙書く。発信地 Missouri 州 St. Louis、宛名書きは“My Dear Mother”。
9 月 27 日から 29 日まで	朝 Elmira の Langdon 家に到着し、29 日夜まで滞在。馬車から落ちて怪我をする。

10月4日と5日	Olivia宛3通目の恋文書く。発信地Connecticut州Hartford。本文が無く、追伸のみが現存。
10月18日	Olivia宛4通目の恋文書く。発信地Connecticut州Hartford、宛名書きは"My Honored Sister"。
10月30日	Olivia宛5通目の恋文書く。発信地Connecticut州Hartford、宛名書きは"My Honored Sister"。
11月21日	ElmiraのLangdon家を訪問し、同家に滞在。Oliviaの婚約の意思を確認し、条件付きの婚約を得る。
11月26日と27日	Mary Fairbanks宛の手紙を書き、条件付きの婚約が認められたことを報告。
11月28日	Olivia宛6通目の恋文書く。発信地New York州New York、宛名書きは"My Dear, Dear Livy"。
12月4日	Olivia宛7通目の恋文書く。発信地New York州New York、宛名書きは"My Dear, Dear Livy"。
1870年1月20日	Olivia宛184通目の恋文書く。発信地New York州Hornellsville、宛名書きは"My child"。
2月2日	ElmiraのLangdon家で結婚。

Twainの恋文は1通目から5通目までのそれぞれの手紙の間隔が約10日間なのに対し、それ以降は約2日に1通の割合で書かれたことになる。最初の5通は、その間隔からも、手紙の内容からも、TwainがOliviaの返事を読んでから書かれたと推測できる。例えば、4通目の手紙は、"You have rebuked me." (*L2*, 266)と始まり、[5] 5通目も"Your welcome letter made me entirely satisfied." (*L2*, 271)という一文で始まる。二通ともOliviaからの手紙に対する返信である。

これに対して、それ以降は必ずしもOliviaからの返事を待たずに書かれている。17ヶ月、実際には1868年11月28日から1870年1月20日までの14ヶ月弱で178通の手紙をTwainは書いた。つまり、彼は1ヶ月に約12通、1週間に約3通の割合で恋文を書いていたことになる。発信地とOliviaの住むNew York州Elmiraとの距離と当時の郵便事情を考慮すると、1868年11月28日以降TwainはOliviaの返事を待たずに矢継ぎ早に恋文を書き続けたのである。ほぼ一方的な情報提供であり、洪水のような求愛であった。

話を年表に戻せば、1868年の9月から文通を始め、Twainは9月27日と11月21日にLangdon家を訪問し、同家に滞在した。9月の末の滞在ではTwainは馬車から落ち、一日出発を延ばす。この時Oliviaが友人のAlice Hookerに"We all enjoyed Mr. Clemens stay with us very much indeed" (Olivia Louise Langdon to Alice B. Hooker, 29 Sept 1868, *L2*, 258)と書いていることから、正式の婚約にまでは至らなかったとしても、二人の親密度が増したことは事実だ。この時にTwainは多分内密にOliviaの結婚の意思を確認したのである。だからこそ、Twainはその直後に、問題の3通目の手紙を書いた。

9月27日のLangdon家訪問後、Twainは有頂天になっていた。その嬉しさを抑えられないTwainはMary Fairbanksに宛てた手紙で、馬車から落ちた話を面白おかしく書いた。二人の結婚を支援していたMary FairbanksはTwainの相談役であり後見人の立場でもあった。Twainは彼女宛に自分がこの事故で重傷を負ったかのように書き、"They buried us both in one grave, but it was too crowded to suit me, because I am not used to sleeping double, anyhow, dead or alive, & so I left, & am here." (To Mary Mason Fairbanks, 5 October 1868, *L2*, 257)と表現している。実際にかなりいいことがあったようで、

> I had an exceedingly pleasant time of it at Mr. Langdon's. I can't *write* about that matter is in your mind & mine, but suffice it that it bears just a *little* pleasanter aspect than it did when I saw you last & I am *just about* that much more cheerful over it, you know. The letter I wrote a little while ago was not to *you.*
>
> (To Mary Mason Fairbanks, 5 October 1868, *L2*, 257)

と続けている。この「少し前に書いた手紙」は 3 通目の恋文である。間違いなく、Twain はこの 9 月末の Langdon 家訪問でよほどいいことがあったのだ。それは、怪我をしたと思われる Twain と彼を看病する Olivia との間で結婚を約束したとしか考えられない。破り捨てられた恋文には、やはり "I love you, Livy." と記されていたはずである。あるいは「婚約」という言葉があったに違いない。

そして 11 月末の訪問で条件付きの婚約を勝ち取ると Twain は大胆なことを書くようになる。12月4日付、7通目の恋文から引用すると、"to remember that my fate was still in your hands & undecided—that our projected & expected engagement was not yet consummated" (*L2*, 307)と書き、"And I must lecture in Newark the very next night (Wednesday,) & shall need a kiss & a kind word from you to help me do my duty by those people" (*L2*, 308)という大胆なことも書いている。ところで、「我々の婚約がまだ成就していなかった」 "our projected & expected engagement was not yet consummated"とあるが、"consummate"という動詞が"the marriage"を目的語にし、性的な行為を意味することを Twain が知らなかったはずはない。もちろん、Olivia も当然それを知っていたはずである。だとすれば、この手紙の"consummate"という動詞には

性的な意味合いが含まれていると考えてよいだろう。Olivia と Twain はどのような行為をもって婚約を成就したのか邪推したくなる。

二人が文通を始めた時には「きょうだいとしての愛情表現しか書いてはならない」という約束だったようだが、[6] Twain は 3 通目の手紙でその約束を破り、そのためにこの手紙の本文が捨てられた。11 月末に条件付きの婚約が認められるまで、Twain は Olivia に"My Honored Sister"と呼びかけている。これは約束に従ったものだ。ところが 9 月 27 日の訪問で Olivia との関係を深めた Twain は、問題の 3 通目の手紙の追伸で、"my dear contrary, obstinate, willful, but always just & generous sister" (*L2*, 255)とかなり呼び方を変えた。4 通目と 5 通目が"My Honored Sister"に戻り、4 通目が"You have rebuked me"で始まる時、Olivia は Twain からの 3 通目の恋文を読み、恋慕をあからさまに記した本文を捨て、Twain をたしなめる手紙を書いたのである。

Twain は 1868 年 9 月末の Langdon 家滞在の際に Olivia の結婚の意思を直接にしかし内密に確認し、キスをした。それで"I love you, Livy"と恋文に愛情を表現すると、まだ親が認めた正式な婚約ではない、と Twain は Olivia にたしなめられた。その後 11 月末の滞在で Olivia の両親から条件付きの正式な婚約を得た。ここからかなり大胆な恋文を書くようになり、Olivia も Twain の恋文をあまり削除しなくなったのである。

2

さて、"I love you."と書き、婚約を成就する、という話になると、これにそっくりの話が Twain の作品にある。*The Adventures of Tom Sawyer* (1876 年出版、以後 *Tom Sawyer* と略す)の Tom Sawyer と Becky Thatcher が最初に学校で出会う場面である。Twain の婚約までの経緯

と Tom と Becky の婚約までの話を相互に参照して見ると、実によく似ている。

まとめてみると、Becky の隣に座った Tom が石板に*"I love you."* (*Tom Sawyer*, 55)と書く。[7] それを見た Becky は"O, you bad thing!" (*Tom Sawyer*, 55)と言いながらも、嬉しそうな様子で顔を赤らめる。そして昼で授業が終わると、二人は学校に残り、Tom の方から婚約しようと言いだす。Becky もよくわからないままに同意し、二人はキスを交わすのだ。*Tom Sawyer* では、Tom が以前の婚約に言及して"Oh it's ever so gay!　Why me and Amy Lawrence—" (*Tom Sawyer*, 61)と口を滑らせるという思わぬ展開をするが、Twain が自らの経験を作品化したとすれば、Twain は 9 月末の Elmira 訪問で Olivia とキスをしたのだろうと推測される。

Twain がこの挿話を *Tom Sawyer* に入れた意図が結婚後の自身の作品の編集者兼検閲者を自任していた Olivia に読ませ、さらに彼女の周辺の人々に読ませることだったとすれば、この作品の解釈が少し変わってくる。Twain はこの小説で自分達の婚約時代を永遠に美しいものとして描きたかったと解釈できる。Tom と Becky の婚約は Tom の失言で難局を迎えたとしても、Tom は町の英雄になることでそれを乗り越えようとする。そして Tom は結婚するために海賊の財宝を探し求める。物語の最後で Tom と Huck とが Injun Joe の財宝を発見し、それぞれが 6000 ドルの金貨を手にすることで経済的成功という問題が解決されている。また、洞窟で迷う場面では Tom は極めて紳士的に Becky を出口へと導き、当時の男らしさを示している。ついでながら、この洞窟の場面では Tom と Becky はキスをしてはいないが、抱き合ったと考えられる。何とも紳士的で美しい話だ。

一方で、Twain と Olivia の婚約時代に Twain の過去の女性関係が二

人の間で問題になったことはない。少なくとも 184 通の恋文の中でTwainの過去の女性への言及はない。OliviaからTwainへの手紙が一部しか公開されていないので不明だが、結婚以前に二人の間でTwainの過去の婚約についてのやり取りはなかったようだ。

しかしTomとAmy Lawrenceとの婚約はTwainの美化された誠実さを露呈している。*Tom Sawyer*の想定される読者にTwainの母親Jane Lampton Clemens (1803-1890)も、姉Pamela Ann Moffett (1827-1904)も当然含まれていた。Twainの結婚以前に彼女達はTwainの書いたものを収集する役割を担当していた。同時にTwainの結婚後も彼女達は彼の作品の重要な読者だった。彼女達は *Tom Sawyer* を読んで Amy LawrenceをEmma Comfort Roe (1844-1904)と読んだことだろう。Twainのパイロット時代の恋人である。

St. Louis屈指の資産家John J. Roe (1809-1870)の娘EmmaとTwainとの関係はClemens家の人々の知るところであった。かつての恋人の結婚を聞いてTwainは母親に"Let her slide—I don't suppose her life has ever been, is now, or ever will be, any happier than mine." (To Jane Lampton Clemens and Pamela A. Moffett, Clemens 1988, 248)と書いている。Emmaの父親が反対し、Twainが1860年にNevadaに向かったことで二人の関係が破局を迎えたことも知られていた。ミシシッピ河の蒸気船のパイロットでは資産家の娘と結婚できなかったのである。この失恋を Amy Lawrence への言及という形で書いたと解釈すると、Twain は Olivia あるいは Becky との関係が修復されたことで Emma Roe あるいは Amy Lawrence などの過去の女性問題は解決したとClemens家の人々に伝えたかったと解釈できる。

Twainの意図が自らを美化することだったとしても、作品としての*Tom Sawyer*は闇の部分も表現している。例えば、Aunt Pollyと血縁関

係の無い Sid Sawyer は学校に行かせてもらえず、従って彼には Tom のような恋愛物語も無い。Aunt Polly にとって Sid は継子のような立場であり、徒弟として働かされているのだ。Sid の稼ぎが Aunt Polly 家の家計を助けている可能性はあるのだ。また、Injun Joe はこの町の、あるいは合衆国の、闇の部分の象徴なのであって、彼が死亡したことで全ての問題が解決したとは考えにくい。この小説では Twain が美しく描きたい部分もあった。しかし同時に、どんなに描いても露呈してしまう暗い部分をも Twain は視野に収め、作品化しているのだ。

作品が作家の実人生をどの程度反映するのか議論が残るとしても、結婚後の Twain にとって第一の読者であった妻 Olivia に対して Twain は自らの婚約話を子供時代の美しい思い出として純化して見せた。Twain がこのように美化して描いたという事実が Twain 読者には意味がある。というのも、彼が一生懸命になって主張することは大抵事実と違うか、かなり脚色されていることがしばしばあるからだ、そのような読者は Tom の婚約話を読んで、Twain が正常な性欲を持つ男だったと読み取るし、作品化して誰かに言い訳している楽しい男だと読み取る。もちろんこれを証明することは至極困難である。それでも、自分の本当の姿を表現してしまうところにこの小説家の魅力がある。

3

ところで、Olivia の両親は Twain からの恋文の一部を読んでいたようだ。というより、Olivia が両親に恋文の一部を読ませていたのである。そうすることで彼女は、条件付きの婚約者が尊敬すべき人物、立派なキリスト教徒になろうとしている人物であることを両親に示したかったのだ。あるいは Twain の指示があったと推測できる。このような事情を理解した Twain は Olivia の両親が読んでもよい部分、ある

いは両親に読ませたい部分と、Oliviaのみに読ませたい部分とを区別して書くようになる。この点についてTwainの『書簡集第二巻』の編集者達は1868年11月28日付の恋文でTwainがOliviaの両親を称賛した文章に注釈をつけて、"Olivia could therefore have easily shown them [three manuscript pages about her parents] to her parents without revealing anything else in the letter." (*L2*, 292)だと推定する。どのページに何を書くかに至るまで、恋文の書き方にも戦略があったのである。

相手によって読ませるページを書き分けるためにTwainは熱烈な愛情表現を追伸で書いたり、一日に2通の恋文を書いた、と解釈できる。典型的な例が6通目の手紙である。「追伸」になるといきなり"I do love, LOVE, LOVE you, Livy, Darling" (*L2*, 292)と書いた。手紙の原本を確認していないが、この「追伸」は手紙本文とは別の紙に書かれていたはずである。もうひとつ例を挙げれば、12月4日付9通目の手紙の「追伸」にも"I do love *you*, Livy" (*L2*, 310)とある。逆に見れば、3通目の恋文の本文が現存しない理由のひとつは、Oliviaの両親に読ませられないことが書いてあったからだと推定できる。つまり、きょうだいとしての愛しか書かないとする約束を破った愛情表現が手紙本文に書いてあったのだ。あるいは立派なキリスト教徒としてふさわしくない表現があったのかも知れない。

TwainがOliviaのみに宛てて書いた部分と彼女の家族宛に書いた部分を区別していた、あるいは区別するようになったとすれば、あまりに過激な愛情表現が書かれていたために捨てられてしまった「追伸」もあったと推測される。「追伸」が最初から別の紙に書かれており、しかもその内容が極めて親密な愛情表現であった場合には、それが隠されたのも当然である。そしてその隠された追伸の内容を復元することはできないとしても、推測することはたやすい。まず間違いなく"I

love you, Livy."と書いてあったはずである。さらにキスしたいとか抱きしめたい、くらいのことは書いてあっただろう。

1868年11月末に条件付きながらOliviaの両親からも婚約を認められたTwainは、「キリスト教徒」になろうとする。11月の訪問直後の6通目の手紙でTwainは、"I believe in you, even as I believe in the Savior in whose hands our destinies are." (*L2*, 289)と書き、"you – you Perfection"(*L2*, 290)と書いている。確かに、キリスト教の教義に関して、Oliviaを「完全な女性」として崇拝することについて、二人の間で多少の議論があったが、Twainは欠点のないOliviaに導かれてより良い人間になるとする自画像を恋文の中に書き続けたのだ。理想化こそTwainの書き方の特質と言える。[8]

ところで、恋文の中でTwainは婚約者の両親や弟Charles Jervis Langdon (1849-1916)を批判する言葉を一言も書いていないが、死後出版の『自伝』の中では義弟に対してかなり厳しかった。1867年に*Quaker City*号で知り合い、自分たちの結婚を支援してくれたはずの義弟をTwainは"Her mother had indulged him from the cradle up, and had stood between him and such discomforts as duties, studies, work, responsibility, and so on." (Clemens 2010, 376)と辛辣に評している。自分とは全く違う裕福な家庭で育った義弟を何もできない駄目な若造とTwainは見ていたのだ。Oliviaに関してTwainによる暴露的な文書はいまだに公開されていないし、今後も出てこないのだろうが、理想的な家庭として作り上げられたTwain夫婦とそれ以外の人物達はTwainの中で区別されていた。

恋文を記録として残すという考えがTwainにはあった。それが必ずしも徹底されなかったが、Twainは自らの書いたものを残したいと考えた。その考えはTwainの自らを伝説として残したいとする願望の表

れだったと解釈できる。自分の死後100年後に出版するようにと膨大な『自伝』を書き残した人物である。その願望ゆえにTwainは手紙も新聞記事も保存するように母親に依頼していた。結婚後はその役割をOliviaが担当するようになる。この新しい担当者が3通目の恋文の本文を捨てたのだろうが、ひょっとするとTwainが捨てさせたのかもしれない。いずれにせよ、残された恋文は誰に読ませてもよい記録になった。『自伝』とは異なり、恋文はTwain夫婦が理想的であることを証明する記録へと編集されたのである。

もうひとつ、Twainが恋文を通じてOliviaの両親に読ませたかったことがあった。それは経済的成功である。これも6通目の恋文から引用する："I saw an old friend of mine at breakfast a while age, (ex-Gov. Fuller,) & he gave me a lot of notices of my New York lecture delivered 18 months ago.... The house was ~~full o~~ crowded, on that occasion, but it was not my popularity that crowded it." (*L2*, 291)。自分がカリフォルニア州前知事Frank Fullerと以前から友人であるだけでなく、18ヶ月も前の講演について語りあったと伝えている。それが成功だったという事実とニューヨーク市で自分の人気が高いことも語っている。一見控え目だが、自分の活躍を婚約者の両親に読ませたいとするTwainの意図を実証する文章だ。

Twainの恋文に一貫して表現されている、Olivia崇拝と、キリスト教徒になる、より良い人間になるというTwainの誓いの言葉は、Oliviaの両親に読ませる部分だった。さらに、Twainは、自己改革だけでなく経済的にも成功しつつあることを恋文の中で示し、自分がOliviaに相応しい結婚相手だと彼女の両親に向かって訴えていたのだ。この両親に読ませていた部分が家族内で伝説化するのに時間はかからなかったはずだ。つまり、Twainは自らを伝説化しながら、同時に*Tom*

Sawyer の Tom と Becky の婚約エピソードのように、家族内で語られる伝説を自らの作品に利用していた。

婚約に関して、家族内の伝説あるいは創り上げられた Twain 像と実際の Twain とは少し違っていた。実際の Twain は、1868 年 9 月末の Langdon 家訪問時に Olivia の意思を確認すると有頂天になってしまう慌て者であり、正直者であった。彼は恋文でも小説でも書きたいことを書いてしまうことがあった。それで時に失敗しても、Twain 自身は家族内の伝説を基にして作られた Twain 像と自身との間にあまり乖離を感じていなかったようだ。皆が求めている自己を作り上げて書くというのが彼の仕事であり、それを少し離れて見ているもう一人の自分も居るというのが彼の本質だったというべきである。

今日我々に残されている恋文は、その多くが読ませてもいいと Olivia が考えた手紙だし、逆に、恋文の、何がどれだけ、どういう理由で消されたのか、全体像は永遠につかめないだろう。しかしこの恋文を通じて自ら造り上げた像を Twain は積極的に受け入れる。彼がそこで強烈な違和感を感じることはなかったようだ。そして Twain は家庭内で伝説化した逸話を自らの創作のひとつの源泉として利用する。アメリカ東部の典型的中流家庭の Langdon 家に喜んで迎えられた Twain 像こそ彼が読ませたかった姿であり、今日でも Mark Twain、特に彼の『自伝』がアメリカで売れ続けているひとつの理由だろう。彼はどの家でも受け入れられる Mark Twain を創ったのである。

* この論文は、「破り捨てられた Mark Twain の恋文」と題して、甲南英文学会第 28 回研究発表会（2012 年 6 月 30 日、於甲南大学）で口頭発表した原稿を加筆訂正したものである。また、この論文の着想は故谷本泰三先生から頂

いたことをここに記し、先生への謝意とする。

Works Cited

Clemens, Samuel Langhorne. *The Adventures of Tom Sawyer.* Berkeley, California: University of California press, 1982.

----------. *Autobiography of Mark Twain, Vol.1.* Berkeley: University of California Press, 2010.

----------. *Mark Twain's Letters, Volume 1; 1853-1866.* Berkeley, California: University of California Press, 1988.

----------. *Mark Twain's Letters, Volume 2; 1867-1868.* Berkeley, California: University of California Press, 1990.

Davis, Sara deSaussure and Philip D. Beidler, eds. *The Mythologizing of Mark Twain.* Alabama: The University of Alabama Press, 1984.

---

[1] 例えば、1906 年 2 月 15 日付の自伝口述筆記で、Twain は Olivia を"All through her life Mrs. Clemens was physically feeble, but her spirit was never weak. She lived upon it all her life, and it was as effective as bodily strength could have been. When our children were little she nursed them through long nights of sickness, as she had nursed her father."と称賛している（Clemens 2010, 361.)。

[2] McWilliams 夫妻（夫 Mortimer と妻 Evangeline）の日常的会話を中心とした三作品で、支配的な妻の様子が面白い。ある程度 Twain の結婚生活を暴露したと考えられる作品で、Twain が Olivia に複雑な気持ちを持っていたと推論できる作品群である。"Experience of the McWilliams with Membranous Croup" (1875)、"Mrs. McWilliams and the Lightning" (1880)、"The McWilliamses and the Burglar Alarm" (1882)、である。

[3] Susy が書いた Twain の伝記があり、そこで Susy は次のように述べている：Papa wrote mamma a great many beautiful love letters when he was engaged to mamma, but mamma says I am too young to see them yet; I asked papa what I should do for I didn't (know) how I could write a Biography of him without his love letters, papa said that I could write mamma's opinion of them, and that would do just as well. So I'll do as papa say, and mamma says she thinks they are the loveliest love letters

that ever were written, she says that Hawthorne's love letters to Mrs. Hawthorne are far inferior to these. (Clemens 2010, 359-60.)

[4] 例えば、1868年12月4日付の、9通目の恋文はもともと全27枚からなり、切り取られた部分が五ヶ所ある。注釈によるとこの手紙の26枚目はTwainが破棄したものだという。恋文を破り捨てたのはOliviaだけとは断定できず、いつの段階かは特定できないがTwainが破り捨てた可能性もある。

[5] カリフォルニア大学版『トウェイン書簡集第二巻』のテキストは、*Mark Twain's Letters, Volume 2; 1867-1868* (Berkeley, California: University of California Press, 1990)を用いた。本文中では *L2* と略記する。

[6] 3通目の恋文に、"Presumably, then, he had broken his promise to express only fraternal affection toward Olivia, which may explain why only this playful postscript survives." (*L2*, 256)と注釈がついている。

[7] テキストにはMark Twain, *The Adventures of Tom Sawyer* (Berkeley, California: University of California press, 1982)を用いた。本文中では *Tom Sawyer* と略記する。

[8] Sara deSaussure Davis and Philip D. Beidler, eds. *The Mythologizing of Mark Twain* (Alabama: The University of Alabama Press, 1984)を参照。

PP主語の派生とラベル*

古川武史

SYNOPSIS

In English, some categories other than DP can appear in subject positions. In this paper, we focus on the PP subject construction and salient properties of the construction, and review two major analyses in terms of PP subjects and point out some problems posed by the analyses. We will attempts to propose an alternative to solve the problems within the framework of the left periphery of Rizzzi (1997) and the minimalist program of Chomsky (2012).

0. はじめに

英語の主語位置に生起するものとして、DP や CP 以外には、(1)にあるように PP の例が観察される。

(1) a. [$_{PP}$ Under the bed] is a good place to hide.

b. [$_{PP}$ Near Boston] has always appealed to me.

主語位置に生じるPPは、DPが省略されているとする分析、音形のないDの補部にあるとするDPシェル分析、指示的なPPであるとする分析などが提案されている。本稿では、(1) のようなPPが主語的な振る舞いをしているPP主語構文についてミニマリスト・プログラム(Chomsky (2008, 2012))やRizzi (1997)の左周辺部の構造分析の枠組みでどのような派生が関わり、またPP主語のラベル(範疇)は何なのかを提案したい。

1. PP 主語構文の統語的特質

PP は、Stowell (1981) が主張しているように、格が付与される位置、すなわち主語や目的語の位置には生じないとされている。このセクションでは、PP 主語構文の主語的な特質を概観することにする。

PP が主語位置にあるという主張は、(2)のような場所を表す前置詞句が文頭に生じる場所句倒置構文（locative inversion）とを比較することで支持される。

(2) a. Into the room walked my brother Jack.

b. On the table was put a valuable book.

c. Down the stairs fell the baby.

PP 主語構文は主語助動詞倒置 (subject-auxiliary inversion: 以下 SAI) の適用を受け、疑問文にすることができるが、一方、場所句倒置構文は SAI の適用を受け、疑問文にすることができない。

(3) a. Is under the bed a warm place?

b. Has near Boston appealed to you?

(4) a. *Is in the room sitting my old brother?

b. *Did down the hill roll the baby?

be 動詞と縮約を起こすか否かについて対比が見られる。

(5) a. Under the rug's the safest spot.

b. Under the bed's a great restaurant.

(6) a. *Under this slab's buried Joan of Arc.

b. *On the wall's hanging a particular ugly picture.

主語と動詞の一致について両構文には違いが見られる。PP主語構文では文頭のPPと動詞との間に数が一致する。

(7) a. Sandy talks a lot about her beach house and the family's Appalachian camping trips. As a result, [$_{PP}$ [$_{PP}$ along the coast]

and [$_{PP}$ in the mountains]] remind me of Sandy's retirement fantasies.

b. [$_{PP}$ [$_{PP}$ Under the bed] and [$_{PP}$ in the fireplace]] are not the best combination of places to leave your toys.

場所句倒置構文では、動詞との数の一致は、文頭の PP ではなく、動詞に後続する DP との間に見られる。

(8) a. In the garden stand/*stands two fountains.

b. Down through the hills and into the forest flows/*flow the little brook.

ECM 補文の節頭の位置に生じることができるかどうかという点においても両構文には違いがある。

(9) I expected [under the stars] to be a nice place to sleep.

(10) *I expected [in the room] to be sitting my old brother.

場所句倒置構文の PP は、話題化構文と平行的であるので、トピックであるとし、一方、PP 主語構文の PP は主語位置にあると考えると、この違いを説明することができる。

(11) *I expected [this book] John to read.

つまり、ECM 補文にはトピックの生じる位置がないため場所句倒置構文は排除され、一方、PP 主語構文の PP は ECM 補文の主語位置にあるために文法的となる。

さらに、両構文の文頭の PP は談話的に異なるということで、主語かトピックかという違いを捉えることができる。

場所句倒置構文は、文頭の PP が疑問文の答え(focus)にはならない。

(12) A: Where did John walk?

B1: John walked into the building.

B2: *Into the building walked John.

(13) A: Who walked into the building?

B: Into the building walked John.

一方、PP 主語構文は疑問文の答えとして問題ない。

(14) A: When are we going to have the meeting?

B: In March suits me.

(15) A: When are we going to have the meeting?

B: During the vacation is what we decided.

Rizzi(2007)が述べているように、トピックは、[+ aboutness], [+ D-linking]であるが、一方、主語は [+ aboutness], [- D-linking]である。その意味では両構文の文頭の PP の談話的な特質はこの定義と合致する。

さらに、場所句倒置構文の前置されたPPがトピックであるならば、このPPが節頭に生じている節はトピック島(topic island)を形成し、その島の中から要素を抜き出すことができないと予測する。それとは対照的に、PP 主語は統語的に主語位置にあるので、PP が主語である補文からの抜き出しにはトピック島は関係なく、文法的であると予測する。

(16) a. John says that near his house lies a buried treasure.

b. *What does John say that near his house lies?

(17) a. John says that under the stars is a nice place to sleep.

b. How nice a place to sleep did John says that under the stars is.

以上のように、PP 主語構文の PP は、場所句倒置構文の前置されたトピックの PP とは明らかに異なる。

次に、PP主語構文の主語位置にあるPPとDP主語との平行性を見ていくことにする。

PP主語は繰り上げなどのA移動の適用を受ける。

(18) a. Under the bed appears to be a good place to hide.
(Cf. *It/There appears under the bed to be a good place to hide.)
b. Near Boston was discussed in detail.

副詞 equally は、複数名詞によって認可される。

(19) a. The combatants were equally intransigent.
b. My rabbits and my hamster are equally annoying.
c. The professor distributed the As and Fs equally.
d. My grandmother was proud of the two children equally.

同様に、PP 主語が複数あれば equally は認可される。

(20) [$_{PP}$ Under the bed] and [$_{PP}$ in the closet] equally remind me of that game of hide-and-seek we played.

しかし、主語でない PP が複数あっても equally は認可されない。

(21) Leslie hid under the bed and in the closet (*equally).

次に、強意を表す再帰代名詞 (emphatic reflexives) の例を見ておく。(22)にあるように、DP は、主語、目的語のどちらの位置に生じていてもこの類の再帰代名詞を認可する。

(22) a. The professor herself offered the student sage advice.
b. The zookeeper forced the monkey itself to clean up the cage.
c. I gave my x-rays to the doctor herself.

主語位置の PP は、強意を表す再帰代名詞を認可する。

(23) a. You don't have to get the ball into the net. Right between the two red makers is itself sufficient to score.
b. Under the bed and in the closet are themselves reasonable places to stash the cash.

一方、主語以外の PP はこのタイプの再帰代名詞を認可しない[1]。

(24) a. Sandy wants to retire in the mountains (*itself).

b. We stashed the cash under the bed and in the closet (*themselves).

以上の観察から、PP 主語構文の文頭の PP は、DP 主語と平行的であり、主語であると結論づけることができる。

2 先行研究

主語位置の PP は、名詞表現が省略されているとする省略分析（Bresnan(1999)、Rizzi and Shlonksy(2007)）と音形を持たない D の補部に PP が生成されているとする DP シェル分析(Davies and Dubinsky(2001)他)がある。また、PP 主語構文の主語の範疇は、指示的な PP であるとする分析(Jaworska(1986))がある。ここでは、主語 PP の範疇は DP であるとする 2 つの分析を取りあげ、問題点を指摘する。

PP 主語には（25）にあるように「場所」、「時間」などを表わす名詞表現が省略されているとする分析(Bresnan(1999), Rizzi and Shlonsky (2007))がある。

(25) a. [$_{DP}$ A PLACE[$_{PP}$ Under the table]] is a good place to hide.

b. [$_{DP}$ A TIME[$_{PP}$ between six and seven]] suits her fine.

Davies and Dubinsky(2001)は、この分析は名詞表現が省略されない場合容認度が下がるか、非文となることがあることを指摘し、名詞表現が省略されているという分析は受け入れらないとしている[2]。

(26) a. ??The location (of) under the table is a good place to hide.

b. *The time at 1 o'clock is when to arrive.

また、PP 主語構文には「手段」を表す PP が主語位置に生じることがある。

(27) a. In capital letters will have the best effect.

b. By air seems to be quite cheep.

c. They consider on foot to be too slow.

そうすると、[$_{DP}$ MEANS]のようなDPが省略されていると考える必要がある。しかしながら、これらの例は次のように言い換える必要がある。

(28) a. Writing in capital letters will have the best effect.

b. Special delivery is good for sending letters.

c. They consider walking to be too slow.

以上の点から名詞表現が省略されているとする省略分析には経験的な問題があると言える。

次に、Davies and Dubinsky(2001)のDPシェル分析を考察する。この分析では、PP主語は音形のないDの補部にPPが生じていると仮定し、セクション1で見たPP主語構文の統語的特質を説明している。

(29) [$_{DP}$ [$_{D}$ φ][$_{PP}$ Under the table]] is a good place to hide.

この分析の概念的な利点の一つには、PP主語はDP主語や他の範疇(CP, AP)の主語同様に、DPとしてTP指定部にあることになり、英語では主語の位置に生じる範疇はすべてDPという一般化が可能になる。したがって、PP主語が通常のDP主語や文主語と同じ統語的特質を持つことが予測されることになる。

しかし、DPシェル分析にも概念的、経験的な問題がある。概念的な問題として、主語位置に生じた場合にPPがなぜ空のDの補部に生じるのかを原理的に説明する必要がある。

次に、経験的な問題点を見ていく。松原（2003）が指摘しているように、同じPPが主語位置にあっても述部や文脈によっては文法性に差がでることがDPシェル分析では捉えることができない。

(30) a. *[After dinner] made John sleepy.

b. [After dinner] will be fine.

c. *[Under the chair] pleases the cat.

d. [Under the chair] attracted the cat's attention.

DP シェル分析では、すべての主語がみな DP であることになるが、その予測に反し、実際には PP 主語構文と他の主語構文には統語的な振る舞いに違いがあり、この構文間の違いが説明できない。

例えば、文主語は様々なトピックと共通した特性を持つことが知られているが、セクション１で見たように、PP 主語はトピック的な特性を示さない。SAI を許すか否かをここでは挙げておく[3]。((3)を(32)として再掲。)

(31) a. *Would for the Giants to lose the World Series really suck?

b. *Who did [that John left early] disappoint?

(32) a. Is under the bed a warm place?

b. Has near Boston appealed to you

このように、PP主語はDPであるとする２つの分析には概念的にも経験的にも問題がある。

3. 代案

先行研究の問題を解決するために、本稿ではChomsky(2012)のラベル決定のアルゴリズムのもと代案を提案したい。

3.1 ラベル決定のアルゴリズム

最初に理論的な背景を確認しておく。Chomsky(2012)は、ラベル決定のアルゴリズム（Labeling algorithm: 以下LA）により投射のラベルが動的（dynamic）に決まることを提案している。

(33) Labeling Algorithm: The category created by Merge inherits the label of the closest head.

併合(Merge)によってできた統語的構築物(syntactic object)は、LAにより、最も近いheadの持つラベルを継承し、ラベルが決まる。また、このラベルは、phase単位でインターフェースに送られた際に統語的構築物が適切に解釈されるために必要となる。

(34) Nodes must have a label to be properly interpreted: the interpretive systems must know what kind of object they are interpreting.

PP主語構文に関わる点に絞り、動的なラベルの決定方法を見ておく[4]。句XPと句YPが併合すると、αができる[5]。

(35) $[_{\alpha}\ [_{XP}\ X][_{YP}\ Y]]$

その際のαのラベルは二つの句のheadのXとYがお互いをC統御しないので、XとYのどちらがαにより近いとは言えない。そのため、αのラベルは決まらず、インターフェースに送られても適切に解釈が行われないことになる。この問題を回避するには、移動またはAgreeのどちらかの統語操作が適用され、それによってαのラベルが決められる。

Chomsky(2012)は、移動した要素が残したコピーはLAには見えないと考えているため、(36)ではαのラベルは、移動していない投射のheadであるYから継承される。

(36) … XP… $[_{\alpha}(XP)\ YP]$

一方、移動が関与しない場合では、XPとYPがcriterial configurationになり、そのXとYにある最もprominentな素性（φ、Q等の素性）がAgreeによって一致する。そうするとαの投射内の要素がみな同じ素性を共有することになり、それがαのラベルになる。さらに、最大投射は次のように定義される。

(37) α is a maximal projection if the node immediately dominating it does not have the same label.

criterial configurationとなった[XP YP]のラベルは、XPとYPがAgreeにより共有する素性を継承するため、XP、YPどちらも動的に同じラベルになる。そのためXP,YPのそれぞれが（37）の定義により最大投射でなくなり、移動要素の条件（38）により、XY, YPどちらも移動できなくなる。

(38) Movement can only involve minimal and maximal projections.

これらの補助的な想定により、LAはRizziが主張するcriterial freezingの効果を原理的に導き出すことができる。

(39) Criterial Freezing: A phrase meeting a Criterion is frozen in place.

3.2 提案

PP主語は、セクション１で見たようにDP主語が生じる位置と同じようにTP指定部にあるとする。ここでは、左周辺部の句構造を採用するので、PP主語はSubjP内部にあることになる[6]。

(40) $[_{ForceP}$ Force $[_{Foc\ P}$ Focus $[_{TopP}$ Topic $[_{FinP}$ Fin $[_{SubjP}$ Subj $[_{VP}$ ….]]]]]

PP主語は、Xバー理論的な範疇として元々はPPであるが、ラベルは派生の過程で動的に名詞的になると考える。この想定は、Chomsky (2012)に従い、criterial なheadの投射であるSubjPが主語PPとが併合してできた統語的構築物αは、Pとφではどちらがαに近いとは言えないが、PPとSubjPは最もprominentなφ素性をAgreeにより共有し、その結果、αのラベルは(41b)のようにφPというラベルを持つ構造になる。

(41) a. $[_{\alpha}[_{PP}$ Under the bed] $[_{SubjP=\phi P}$ Subj [is a good place to hide]]]

b. $[_{\phi P}$ $[_{\phi}$Under the bed]$[_{\phi}$ is a good place to hide]].

なぜPP主語が主語位置に現れることが可能なのかという点については、PPが内在的にφ素性を持ち、SubjとAgreeによって一致するためということになる。

(42) $[_{P}$ …φ…]

この点は、PP 主語と動詞との間に数の一致の例(43)や PP 主語を代名詞で受けうることができる点(44)からも明らかである。

(43) Under the bed and under the table are good for sleeping.

(44) Under the bed is a warmer place than it used to be.

PP と SubjP(=φP)が併合してできた新たなφP はインターフェースに送られ、DP 主語の場合と同じように適切に解釈されることになる[7, 8, 9]。このように仮定することにより、PP 主語は、DP 主語と共通する一連の事実が捉えられる。

主語位置以外の PP は criterial configuration になることはなく[10]、Agree 関係が成立しない。このような PP は、φP の投射の一部にはならず、DP 主語的な特質がないと予測される。

4. 結語

本稿では、PP 主語構文の特性に焦点をあて、どのような派生が可能かということを考察した。ミニマリスト・プログラムや左周辺部の構造分析の枠組みを採用し、PP 主語の範疇については、criterial configuration になり、その時に最も prominent なφ素性が Subj と Agree により一致し、その際に LA に従い PP が、DP 主語が生起する投射と同じφP の一部となる。そのような場合に PP は主語として機能することになると主張した。これらの提案により PP 主語構文の統語的特質が統一的に説明することが可能であることを示した。

目的語位置に生じる PP については、本稿では特に触れなかった。しかし、主語位置と同じように Agree によって PP が名詞的になると考えることができる。つまり、主語同様、目的語と V との間には Agree が関わるためである。しかしながら、目的語の位置は、criterial position ではない。また、ラベルの点からも問題があると思われる。動詞と目

的語が併合されると、[$_{\alpha}$ V PP]となり、この投射αのラベルは、LAに従えば最も近いheadのVとなると考えられるからである。

また、文主語との違いについては、文主語は、古川(2012)ではTopPまたは主語位置に生起すると提案したが、一方、PP主語は、本稿において主語位置のみに生じるとした。PP主語と文主語とのこのような違いはなぜ生じるのかという疑問が残る[11]。

これら二つの点は今後の研究課題としたい。

参考文献

有村兼彬. 1987. 「前置詞句主語について」『英語青年』4月号, 22. 研究社.

Bresnan, J. 1994. Locative inversion and the architecture of universal grammar. *Language* 70, 1-131.

Chomsky, N. 2007. Approaching UG from below. In U. Sauerland & H. Gartner (eds.) *Interfaces + Recursion = Language? Chomsky's Minimalism and the view from syntax-semantics*, 1–30. Mouton de Gruyter, Berlin.

Chomsky, N. 2008. On phases. In Freidin, R. *et al.* (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166. MIT Press, Cambridge, MA.

Chomsky, N. 2012. Problems of projection. ms. MIT.

Davies, W. and S. Dubinsky 2001. Functional architecture and the distribution of subject properties. In W. Davies and S. Dubinsky (eds.) *Objects and Other Subjects*. 247-279. Kluwer. Netherland.

Davies, W. and S. Dubinsky. 2010. On the existence (and distribution) of sentential subjects. In D. B. Gerdts, *et al.* (eds.), *Hypothesis A/hypothesis B: Linguistic Explorations in Honor of David M. Perlmutter*.111-128. MIT Press, Cambridge, MA.

出原健一. 1998.「前置詞句主語構文に関する一考察 —認知文法とアフォーダ

ンス理論―」『人文科学論集. 文化コミュニケーション学科編』 32, 25-36.

古川武史. 2012. 「文主語の範疇と統語位置」『甲南英文学』27, 40-56.

Iwasaki, H. 2007. On the prepositional subject construction. Tsukuba English Studies 26, 109-126.

岩崎宏之. 2008. 「前置詞句主語の述部制約について」*JELS* 25, 91-100.

岩崎宏之. 2009. 「前置詞句主語と指示性」*JELS* 26, 81-90.

Jaworska, J. 1986. Prepositional phrases as subjects and objects. *Journal of Linguistics* 22, 355-374.

海寳康臣. 2001. 「前置詞句主語構文について」『立命館英文学』 9, 14-27.

Kayne, R. 2010. A short note *where* vs. *place*. In R. Kayne *Comparisons and Contrasts*. 82-94. OUP. NY.

松原史典. 2003. 「前置詞句主語の統語的・意味的条件について」『英語語法文法研究』 10, 135-148.

松原史典. 2009. 「前置詞句主語の認可条件について」『英語語法文法研究』16, 35-51.

三上傑. 2012. 「英語における前置詞句主語構文とAboutnessに基づく主語の定式化」 *Conference Handbook* 30, 117-120. 日本英語学会.

大庭幸男. 1998. 『英語構文研究』英宝社.

Rizzi, L. 1997. The Fine Structure of the Left Periphery. In L. Haegeman (ed.), *Elements of Grammar. A Handbook in Generative Syntax*. 281–337 Kluwer, Dordrecht.

Rizzi, L. 2005. On some properties of subjects and topics. In L. Brugé, *et al.* (eds.). *Proceedings of the XXX Incontro di Grammatica Generativa*. Venezia, Cafoscarina.

Rizzi, L. 2012. Cartography, criteria, and labeling. ms. University of Siena and University of Geneva.

Rizzi, L. and U. Shlonsky. 2006. Satisfying the subject criterion by a non subject: English locative inversion and heavy NP shift. In M. Frascarelli (ed.) *Phases of Interpretation.* Mouton de Gruyter, Berlin.

Rizzi, L. and U. Slosnky. 2007. Strategies for subject extraction. In U. Sauerland and H. Gartner (eds.) *Interface + Recursion = Language?* 115-160. Mouton de Gruyter, Berlin.

Rochemont, M. and P. Culicover. 1990. *English Focus Constructions and the Theory of Grammar.* CUP, Cambridge.

Stowell, T. 1981. Origins of phrase structure. Ph.D. dissertation, MIT.

坪井栄治郎. 1990 a. 「「前置詞句主語」と主語に対する範疇の指定」『電気通信大学紀要』3, 173-189.

坪井栄治郎. 1990 b. 「主語に対する範疇指定不要論と非名詞句主語の異質性」『電気通信大学紀要』3, 313-322.

---

*本研究は平成24年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号：22520506 研究課題名　左周辺部構造と主語の特異性に関する統語研究　代表者　福田稔）の援助を受けている。

註

[1] Davies and Dubinsky(2001)によると目的語位置のPPは、強意を表す再帰代名詞を認可する。

(i) a. I chose under the bed and in the closet themselves rather than under the sofa and behind the door.
    b. *I hid my comic books under the bed and in the closet themselves, rather than under the sofa and behind the door.

彼らは、PP主語と同じように目的語位置に生じるPPについてもDPシェル分析を提案している。詳しくはDavies and Dubinsky(2001)を参照のこと。目的語位置のPPについては、本稿では特に扱わないが、基本的にはPP主語と同様の分析が可能であると考えている。

[2] 松原(2003)等のように、主語位置に生じるPPは「場所」「時」「手段」などに限られるので、意味的機能的な制約を立てる必要があると思われる。ま

た、PP 主語を許す述部にも制限があることが指摘されている。海寳(2000)では、PP 主語の談話機能的な特質を議論している。これらの点はインターフェースの問題として捉え、本稿では扱わないことにする。

[3] Davies and Dubinsky (2001, 2010)によると文主語構文に SAI を適用して、疑問文にできるとしている。古川（2012）ではその事実も踏まえ、文主語はトピック位置、主語位置どちらの位置にも生起可能であると仮定している。

[4] 詳しい議論は、Chomsky(2012)および Rizzi(2012)を参照のこと。

[5] 議論をわかりやすくするために X バーの表記を使うことがある。

[6] ここでの左周辺部の構造は、Rizzi and Shlonsky (2006, 2007)に従っている。Subj は、Subject Criterion が適用される位置を形成する head である。Chomsky(2012)に従い、この Subj が持つ最も prominent な素性は φ 素性とする。この意味では、SubjP は、厳密には φP となる。また Rizzi (2012) では Subject Criterion を引き起こす head と素性は φ 素性ではなく、φ 素性をさらに細かく分け、人称素性が criterial head であり、criterial feature としている。

[7] Jaworska(1986)が、PP が指示的（referential）である場合に主語位置や目的語位置に生じることを可能にするという条件を提案している。本稿での提案は、この条件をミニマリスト的に述べた直したものと言えるかもしれない。

岩崎（2009）はその根拠として大庭（1998）に従い指示性について動機づけを行っている。岩崎によると多重疑問詞構文を許す疑問詞は when, how であり、これらの疑問詞は指示的素性を持つと主張している。これらの疑問詞は、PP 主語になり得る「場所」「時」を表す前置詞と一致する。

(i) a. I wonder what you fixed *t* {*why/*how/when/how}.
    b. I wonder {*why/*how/when/where}you fixed what *t*.

しかしながら、指示素性を持つ付加詞的な疑問詞と PP 主語となる前置詞は完全に平行的とは言えない。本文でも見たように、手段を表す PP も主語位置に生じることがあり、Jaworska (1986), 有村(1987)等でも触れられている事実である。

(ii) a. In capital letters will have the best effect.
     b. By air seems to be quite cheep.

[8] PP 主語の Case については、A 移動(i)の例が示すように、通常の DP と同様に Case は未指定であり、Agree によって値が決まると仮定することが可能である。

(i) a. Under the bed appears to be a good place to hide.
    b. *It/There appears under the bed to be a good place to hide.

この仮定は Jaworska (1986)の[CASE, ZERO]と基本的に同じ考え方である。この格は、要素が生起する位置により主格、対格など値が決まり、[CASE, ZERO]、[-N]などの素性を下位範疇化素性で捉え、PP 主語や目的語の分布を記述している。詳しいくは Jaworska (1986)を参照のこと。

Case の問題の解決方法として、もう一つ可能性がある。PP は、DP とは異な

り、Caseは関係ないとし、(ib)のような場合にはPPがcriterial positionあるのではなく、素性を共有できない位置に留まっているために非文になるとすることも可能と思われる。

本稿では、詳しい議論は行わないが、後者の立場を取ることにする。

[9] 註3でも述べたように、PP主語がインターフェースに送られた後に様々な意味的機能的な制約がかかると想定する。

[10] もちろん、Chomsky(2008)等に従うと、他動詞であれば、目的語とVとの間にはAgree関係が成立する。ここでは、付加詞として用いられる前置詞のことで、Agreeの操作でϕ素性が関わらない場合について述べている。

[11] この点については一つの可能性を示唆しておきたい。文主語の範疇はCPであるが、一方PP主語はPPである。古川（2012）および本稿の提案では、どちらの範疇の主語もAgreeの操作を経て名詞的になることを仮定しているが、これらの主語には本質的な違いがある。文主語のCPには左周辺部があるが、一方、PPにはない。どちらの構文にもAgreeが関与するが、もとものとの範疇の違いで、トピックになれるか否かの違いが生じると説明できるかもしれない。さらに言えば、LAのもとでどのような素性がAgreeによって共有され、criterial positionのラベルが決まるかという点で、文主語とPP主語との統語的な振る舞いの相違が原理的に導き出せるかもしれない。いずれにしろ、様々な視点で検証する必要がある。

On the Absence of Processes in Non-finite Clauses

Kazukuni Sado

Synopsis

This paper deals with expressions found in the study of US presidents' speeches. The expression is made up of Adjective optionally followed by prepositional phrases. We shall prove these expressions are clauses whose verbs are omitted. We shall study what kind of experiential meaning they express. The careful study shows that they express relational process. This process have six subclasses only one of which the clause in question express. We conclude the only process they express is Attribute: intensive.

0. Introduction

Studies in non-finite clauses often shed light on interesting properties that finite clauses rarely have. For instance, Sado (2011a) found some non-finite clauses that lack Rhemes. Some clauses in the Inaugural addresses of U.S. Presidents drew my attention. Their typical structure is comprised of Adjectives optionally followed by prepositional phrases. The context and semantics make it difficult to disregard these examples as merely circumstances inside the clause. We shall compare these peculiar expressions to similar non-finite clauses and discuss how they are related to and differ from each other.

1. Adjunct or clause?

It is necessary, first of all, to consider if the examples in question deserve clausal status. See the examples below.

(1) While keeping our alliances and friendships around the world strong, ever strong, we will continue the new closeness with the Soviet Union consistent both with our security and with progress in the same clause complex. (G.H.W.Bush)

(2) We can never again stand aside, prideful in isolation.
(Johnson)

Here the expressions "consistent both with our security and with progress", and "prideful in isolation" seem to be neither participants nor circumstances, but they are semantically equivalent of dependent clauses. They, however, lack Finite or Predicator that express processes. Note that this kind of expression are often in parallel structure with non-finite clause.

(3) America would be a place [[where each man could be proud to be himself: stretching his talents,
rejoicing in his work,
important in the life of his neighbors and his nation.]]
(Johnson)

(4) Now the trumpet summons us again
—not as a call [[to bear arms]],

though arms we need;
not as a call to battle, though embattled we are
—but a call [[to bear the burden of a long twilight struggle, year in and year out, ||"rejoicing in hope, ||patient in tribulation"—a struggle against the common enemies of man: tyranny, poverty, disease, and war itself]]. (Kennedy)

The phrase "important in the life of his neighbors and his nation" is parallel with "stretching his talents" and "rejoicing in his work"in (3) and "patient in tribulation" is parallel with "rejoicing in hope" in (4)[1.] These expressions are in parallel by themselves as in (5) and (6) below.

(5) I stand here today
humbled by the task before us
grateful for the trust [[you've bestowed]],
mindful of the sacrifices[[borne by our ancestors]].(Obama)

(6) So let us seize it, not in fear, but in gladness—
and, "riders on the earth together," let us go forward,
firm in our faith,
steadfast in our purpose,
cautious of the dangers;
but sustained by our confidence in the will of God and the promise of man.
(Nixon)

The lack of Predicators does not necessarily deprive the clausal status from certain expressions. Note Halliday and Mathiessen's (2004:214) claim that "the Process is in fact structurally absent in certain non-finite relational clauses in English". See their example.

(7) the animals might have moved about in family groups, with the younger ones in the middle for protection

The process which is absent here is "being". Therefore the non-finite clause in example (7) means "being in the middle for protection".

2. Finiteness and classification of participle clause

This example alone, however, may not convince you that the expressions in (1) – (6) have the status of clause. Halliday and Mathiessen's example has quite different structure. One might ask how (7) is related to (1) – (6). Sado (2009:50) notes that finiteness is gradient. It is possible for gerund-participle clauses to have Subjects. The presence of the Subject makes a non-finite clauses look more like finite clauses in spite of the absence of the Finite verb. However, majority of participle clauses lack Subjects and start with the Predicator. Some clauses are introduced by conjunctions or prepositions. (Note that these are not adjuncts inside the clause. See Sado (2008) for the detailed discussion on this issue.) These types of examples fall somewhere between the finite clauses and prepositional phrases functioning inside the clause. I went through the examples in the Wordbank online and classified them into four types. I would like to express my gratitude again to Collins and

Shogakukan for permission to quote examples in the present study. The first type, which we shall call "Type I" is introduced by conjunctions or prepositions, and have Subjects.

(8) Reduced humidity and a lower temperature means greater hygiene with food being more appetising and of a higher quality .

(9) ` With this World Cup being in France , England may be too close in 2006 .

(10) Our own children love their annual cross-country skiing , with their particular favourites being Kandersteg and Geilo .

The non-finite clause in question precedes the finite one in (9), while they follow the main clause in all other examples. All the non-finite, dependent clauses are introduced by prepositions. All of the examples above have "with". As Biber et al. (1999:198) notes, non-finite clauses frequently lack an explicit subject. As far as US president's speeches are concerned[3], Sado (2011b:74) has shown that those with Subjects comprise only 9.6 percent of all the non-finite clauses in the corpus.

The examples (11)-(14) have Subjects but are not introduced by conjunctions or prepositions. We label these examples as Type Ⅱ.

(11) It's the dead come to life , the dead not being properly dead but parodying life and creativity and productivity .

(12) Pruning back the stems of the willow , dogwood and bramble should be done when shoots start to develop in mid-spring , the willow being a_little earlier than the others .

(13) The chalet forms two units , the smaller being the ground floor , with one double bedroom and another with two bunks .

(14) It is there the madmen of Ireland used to go when their year in madness was complete , that glen being ever a place of great delight for madmen " .

The crucial factor of finiteness is the presence of the Finite verbs. Examples (8) – (14) all have Subjects and Predicators, but lack Finite verbs.

Type III and type IV we shall see below are without Subjects. Type III is introduced by conjunctions or prepositions.

(15) They 're always protecting themselves by being assertive .

(16) I 'm already endangering your life just by being here .

(17) Renaissance man : not content with being Britain 's best-known magician , Daniels also offers a tip on successful sales learn magic .

(18) One of the most visited roads in San Francisco , it has a reputation for being the crookedest street in the world .

Like examples in (8)(9)(10) above, they are introduced by various prepositions: by, with, for.

(19) Being familiar with Turkey , Alannah Dowling knew the feeling she required for the ` oriental " room .

(20) The tracks are slightly different from one_another because the left microphone , being closer to the musicians at the left , picks up their sound slightly sooner and louder than does the microphone at the right .

(21) Being the sign of relationship , Librans seek to achieve the balance their symbol the scales represents .

These clauses, which we shall label as Type IV, lack Subjects and are not introduced by prepositions or conjunctions. The participle clauses precede the main clause in (19) and (21), while it follows in the example in (20). The examples (1) – (6) seem in a way like examples (19) and (20), the only difference being that Predicator "being" seemed to be omitted in the former. Complements are adjectives as "familiar" in (19) and "closer" in (20) are parallel to "consistent", "prideful", "important", "patient", "grateful", "mindful", "firm", "steadfast", "cautious". "the sign of relationship" in (21) is a nominal group. Halliday and Mathiessen's (2004:24) example (7) seems to be equivalent of "being" omission of Type I in (8)(9)(10). As we have noted above, examples in Type I are the closest to the finite clauses. All these clauses are no doubt non-finite and as a clause, more metaphorical

as a clause. If the type Ⅰ is the closest to the finite one, it is the most congruent form of all the four types. They are, however, not Adjuncts inside the clause. Finite or not, "figure" in Halliday and Mathiessen (1999:236) is congruently realized by the clause. Examples (1) – (6) in US presidents' speeches are far more metaphorical than all the examples in types Ⅰ —Ⅳ.

3. Process types

Now the question arises. What are the characteristics of this type of clause? Since they are the most metaphorical ones they must have limitations in the meaning they express.

Having seen that examples in question are omissions of the Process "being" in participle clauses, we shall consider the restrictions or constraints that these expressions have. How does the lack of the verb restrict the experiential meaning of the clause? Before we go into the discussion, we need a brief overview of the process types. Systemic Functional Grammar classifies Process into six types. The three major processes are material, mental and relational. See Halliday and Mathiessen (2004:171). Other three processes are verbal, existential and behavioral. The focus of our attention is the relational process, which we shall discuss later in detail.

3.1. Material process

The material process matches the traditional definition of the verb. The typical examples of material process is "doing" and "happening". According to Halliday and Mathiessen (2004:179), it construes a quantum

of change in the flow of events as taking place through some input of energy. See an example from Bloor and Bloor (2004:110-111)

(22) Jerry took the money.

The performer of the action "Jerry" is labeled as "Actor" and the other participant that undergoes the action is the "the money", labeled as "Goal".

3.2. Mental Process

Bloor and Bloor (2004:116) define this type of process as "phenomena best described as state of mind or psychological events". Here is an example from Thompson (2004:92)

(23) She could hear his voice.

"She" experiences the process as "Sensor". That which is experienced is "his voice" as "Phenomenon".

3.3. Verbal Process

Verbal, Existential and Behavioral processes all lie between two of the three major processes. In fact there are no clear boundaries between the processes and some cases are often difficult to determine which process the particular example belongs to. The verbal process falls between material and mental . Speaking is no doubt an action, but it is also a vocalization of what we think and feel. (24) and (26) are from Thompson (2004:100) and (25) is from Bloor and Bloor (2004:122)

(24) 'You're very sure of yourself', she admonished him, gently

(25) I said I wanted to be dropped off somewhere in the neighborhood of the Green Western Hotel.

(26) He repeated the warning.

The person who produces the utterance is called the "Sayer". "she" in (24), "I" in (25), and "He" in (26) are the Sayers. The content of speech is expressed differently in all three examples. (24) has a direct speech, which is labeled "Quoted". (25), on the other hand, as Bloor and Bloor (2004) notes, is "in line with the perspective of the speaker or writer who is reporting the speech". It is therefore labeled "Reported". (26) has "the warning". It is a summary of message in the form of a nominal group. It is called the "Verbiage". (24) has another human participant besides the Sayer. "him" is the person who is spoken to. A participant like this is labeled "Receiver".

3.4. Existential Process

As the name suggests, Halliday and Mathiessen (2004:257) define this process that "something exists or happens". See an example from Thompson (2004:104)

(27) There was a ramp leading down.

Here the only participant is "a ramp" labeled as "Existient".

3.5. Behavioral Process

I must admit that Behavioral Process is the most elusive one among the six types of processes in systemic functional grammar. In Bloor and Bloor's (2004:126) words, "This is the grey area between material and mental processes". They express physiological behavior or a conscious physical act involved in perception. The examples of former cases are breathing, smiling, dreaming as in the example from Halliday and Mathiessen (2004:251)

(28) I thought I was dreaming.

"I" in the projected clause is called the "Behavor". (29) is an example of the latter from Thompson (2004:103)

(29) He stared in amazement as she leapt through the window.

While "looking" is a mental process, "staring" is more conscious and reflect emotions.

3.6. Relational Process

Of all the six process types in the systemic grammar, relational process is the central to our discussion. This type of process expresses the relationship between two concepts. As Bloor and Bloor (2004:120) illustrates, they "are typically realized by the verb be or some verb of the

same class (known as copular verbs): for example, seem. become, appear or sometimes by verbs such as have, own, possess". See their example:

(30) She was hungry again.

In this example, as they note, "ascribes an attribute to some entity". (30) is the typical example of relational process. Another function of this process is "to identify one entity in terms of another". (Thompson (2004:96)) The example is again, from Bloor and Bloor.

(31) Quint is his name.

Halliday and Mathiessen (2004:215) divide the relational process into "two distinct modes of being". These two principal relational types are further classified into three types: intensive, possessive, and circumstantial. This makes six subtypes of the relational process. We shall have an overview of each subtypes.

3.6.1. Intensives

Attributive: intensive

We have already seen an example of Attributive intensive in (30). "She" carries the attribution, and is called a "Carrier". "hungry" is labeled as "Attribute".

Identifying: intensive

As we have seen above, this subtype of the process identifies or defines something . In Eggins' (2004:241) words "x serves to define the identity of y". See her example.

(32) You're the skinniest one here.

The more general category in this type of clause is labeled "Value" and the specific embodiment is called the "Token". Both of them are realized by nominal groups: "You" and "the skinniest one here". The more specific definition is as follows:

The Token will be a sign, name, form, holder or occupant of a Value which gives the meaning, referent, function, status or role of the Token. The Token then is the nominal group which contains the name and the Value is the nominal group which gives the classification.

Following this definition, Eggins gives "you" the Token status and "the skinniest one here" the status of Value.

3.6.2. Circumstantial

The circumstantial relationship in attribution expresses time and place. The following examples are from Thompson (2004:121)

(33) The kitchen was at the back of the house.

(34) Dinner will be in about 20 minutes.

Eggins (2004:246) notes that both Token and Value in identifying circumstantials will be circumstantial elements of time or place.

(35) Yesterday was the last time Di gave blood.

Token	Process	Value

(36) The operation took one hour.

Token	Process	Value

3.6.3. Possessive

The possessive relationship expresses ownership. The commonest and the most unmarked verb for this process is "have".

(37) You have 8 pints of blood.

Halliday and Mathiessen (2004:244) further explain that this process represent not only the narrow sense of owning but also possession in a broader sense such as part-whole relationship, containment, involvement and so forth. The Subject "You" in (37) is called "Carrier: possessor" while "8 pints of blood" is named "Attribute: possessed".

See an example of identifying possessive from Eggins (2004:247). Token encodes the possessed and Value encodes the possessor in the example below.

(38)	The bomb	was	her boyfriend's
	Token / Possessed	Process	Value / Possessor

She also notes that "own" is the commonest identifying possessive.

(39)	Her boyfriend	owned	the bomb
	Token / Possessor	Process	Value / Possessed

4. Relational Process in finite clauses

Before going into the discussion on relational processes in non-finite clauses, we need to elaborate on each subtypes of the Process in light of our corpus. We could find all subtypes in the finite clauses in the US presidents' inaugural addresses. The three examples below have Attributive Processes.

(40) But the stakes for America are never small. (G.W.Bush)

(41) In those times no prize was beyond our grasp.(Carter)

(42) But we have no promise from God that our greatness will endure. (Johnson)

Example (40) is a case of attribute, with "the stakes for America" as the Carrier and the Attribute is "small". (41) is circumstantial, its Attribute "beyond our grasp" denotes a location. Possessive Process is expressed by

"have" in (42) which is the commonest verb of possession as we have noted above.

Examples (43)-(45) below are identifying.

(43) This is the price and the promise of citizenship.(Obama)

(44) This can be such a moment. (Nixon)

(45) The next man to stand here will look out on a scene different from our own because ours is a time of change — rapid and fantastic change bearing the secrets of nature, multiplying the nations, placing in uncertain hands new weapons for mastery and destruction, shaking old values, and uprooting old ways. (Johonson)

(43) is intensive and the Token "This" refers to "responsibility" that Obama mentions earlier. (44) is circumstantial. The Token "This" refers to "today" that is, the moment of Richard Nixon's first inaugural address on January 20, 1989. The phrase "because ours is a time of change" in (45) is possessive whose meaning is expressed in "ours", the Value.

5. Relational Process in non-finite clauses

We have seen so far examples of relational process in finite clauses. Let us now return to non-finite ones. The examples (8) – (21) were classified from a syntactic perspective such as presence or absence of the Subject. We now classify them in terms of subtypes of the relational

process. Possessive is typically expressed by have and some other verbs, we shall add examples with "have" and "own".

5.1. Attributive

Among the Attributes in the examples (8)(11)(15)(19) are all intensive. Since (15) and (19) are without Subject, they lack Carrier and the only participant in the clause is the Attribute. Circunstantials are in (9)(12)(16) and (20). (12) expresses the time, while all others show the locations. Like intensive ones, clauses without Subject naturally lack Carrier and the only participant is the Attribute as in (16) and (20). Attributive possessives, as we mentioned earlier, typically involve the verb "have" and non-finite clauses are no exceptions. Although they are not cognates of being omissions we focus on in this study, it is interesting to observe that all four constructions had examples of possessives in attribution.

(46) On Wednesday , Treasurer Ralph Willis announced that approval of the CRA-RTZ dual listed company merger would be conditional on CRA having management control of exploration and mining operations in Latin America .

(47) Now the only two players to be fixed up on long term deals are Paul Ritchie and Colin Cameron - both having talks .

(48) This was shown in the detail that while rail property had been sold , suddenly the Mt Tyson cream shed was seen as having heritage status .

(49) Having little command of English , she simply smiled at them toothlessly when she arrived with mugs of steaming cocoa .

5.2. Identifying

Examples of intensives are found in all four constructions. Among (10)(13)(17)(21), (17) and (21) lack the Subject inside the non-finite clause, the participant plays the role of Value, and the Token is found in the finite clauses within the clause complex, such as "Daniels" in (17) and "Librans" in (21). The situation is quite different when it comes to circumstantial. We found only one example and it belongs to Type Ⅱ, that is with conjunction or preposition followed by Subject. It is example(14), and the Token is "that glen", while the Value is "a place of great delight for madman". The commonest identifying process is as Eggins (2004:248) notes to own, the example below have "own" as process. We could not find non-finite identifying possessives with "being" in our corpus of Presidents' speeches.

(50) He questioned whether shareholders had been consulted on the decision to invest , with Cons Rutile owning 50 percent of the mine .

(51) If you 've ever thought of owning an elegant home in one of Britain 's most beautiful cities-not is the time to act !

(52) Today , Chief Richard Milanovich and his 100-strong tribe is the richest in America , owning half of the city , alternate mile-square morsels

in its chequerboard grid , the new casino , the site of the convention centre and several hotels , including the Spa .

All these examples have "owning" as the Process. We could not find any example in the Type Ⅱ construction.

6. An overview of non-finite relational clause

As we have seen, although all the six subclasses of relational process are found in the finite clauses, some of them were lacking in non-finite examples. Identifying processes lacks circumstantial in Type Ⅰ and Type Ⅳ and possessives in Type Ⅱ. This could be attributed to the amount of examples in the research. Identifying circumstantials and possessives were not easy to find compared with other subtypes even in finite clauses. Finite or non-finite, all types of relational process should be possible. At least up to now, all six subtypes in the finite clauses and four examples of subtypes in the non-finite clauses have been observed. These four types are Attributive: intensive in (19), Attributive: circumstance in (20), Identifying: intensive in (21). Although the verb in (49) is "having", it is a non-finite example of Attributive: possessive.

7. On being omission

We shall now return to the peculiar examples in the Presidents' speeches. We can infer from the examples we have seen so far that the participle clauses that start with adjective but omit "being" are on the extension of example types Ⅰ to Ⅳ. They are obviously much less finite than the type Ⅳ, which lack conjunction or preposition and Subject.

Let us now consider what kind of processes the examples (1)-(6) express. They seem to share the same syntactic construction: Adjective followed by prepositional phrase. From an experiential perspective, they are Attribute followed by Circumstance. The omitted Subject or Carrier can be inferred from the context. They should be "I" that is, the President himself, or "we" the President and the fellow Americans or simply "America". Note here that in (3) – (6), the non-finite clauses have parallel, paratactic structures with other non-finite clauses. (3) and (4) are in paratactic relationship with gerund-participle clause while (5) and (6) are with past participle clauses. Now the question arises, what kind subtype of relational process do they express? Among the factors that differentiate between Attributive and Indentifying process that Thompson (2004:99) suggests is the word class the second participant. "If the second participant is an adjective, it must be an Attribute and the process must be attribute rather than identifying". Note that (1) – (6) have only one participant and their word class is, as we have seen, adjectives. Since Subjects are optional in non-finite clauses, it is natural to regard these adjectives as "the second part" that Thompson refers to. Thus all the nine clauses are Attributive. However, Attributives have three subtypes, intensive, circumstantial, and possessive. The adjectives "grateful", "mindful", "consistent", "firm", "steadfast", "cautious", "important", "prideful", and "patient" are hardly circumstantial in that they do not denote location or time. No ownership is expressed in these adjectives, either. These processes are, therefore, intensive. We can conclude that when the "being" is omitted in the non-finite gerund-participle clause, the clause is exclusively have Attributive: intensive process.

8. Conclusion

We have seen that peculiar examples in the Presidents' speeches are omissions of the Process. The verb in question is "being". Comparisons with similar participle clauses convinced us that these examples are by no means bizarre. From a experiential perspective the only Process they express is relational. Of the six subtypes of relational processes the only subtype they express is Attribute: intensive. This constraint is attributed not to the non-finiteness but the structure itself. We do not claim that this kind of expressions are limited to Presidents' speeches. Studies in varieties of register would shed light on more and more interesting characteristics of non-finite clauses.

Notes

1 These parallel structures in (3)and(4) is embedded in the main clause. While it is more evident and easy to understand to cite examples of parallel structure in the main clause, these examples are by no means inappropriate.

2 This is a term in Hoddleston and Pullum (2002:80), a term that covers both traditional gerund and 'present' participle. They believe it untenable to make the distinction.

3 This study is based on the analysis of U.S presidents' speeches. I have analyzed the first inaugural addresses of the past ten presidents : Barack H. Obama, George W. Bush, William J. Clinton, George H.W. Bush, Ronald W. Reagan, James E. Carter, Jr., Gerald R. Ford, Richard M. Nixon, Lyndon B. Johnson, and John. F. Kennedy.

References

Biber,D., Johanson,S., Leech, G, Finegan,E. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English* Longman

Bloor, T and Bloor, M. (2004) *The Functional Analysis of English* second edition Arnold

Eggins,S.(2004) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics* second edition Continuum

Halliday, M.A.K and Matthiessen, C.M.I.M. (1999) *Construing Experience Through Meaning* Continuum

Halliday, M.A.K and Matthiessen C.M.I.M. (2004) *An Introduction to Functional Grammar* third edition Arnold

Huddlston, H and Pullum, G.K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language* Cambridge University Press

Otani,T.(1993) *America Daitoryo no Eigo Kennedy / Johonson* ALC

Otani,T.(1993) *America Daitoryo no Eigo Nixon / Ford* ALC

Otani,T.(1994) *America Daitoryo no Eigo Carter / Regan* ALC

Otani,T.(1994) *America Daitoryo no Eigo Bush / Clinton* ALC

Sado,K.(2008)On the role of 'Gerunds' in clause combinations The Council of College English Teachers Research Reports No27

Sado,K.(2009)Grammatical Metaphor as a Relative Scale of Nominalization Konan Eibungaku No.24

Sado,K.(2010)On the Degree of Grammatical Metaphor in Embedded Clauses Memoirs of Niihama National College of Technology Vo.46

Sado,K.(2011a) On the Optional Status of Rhemes in Non-finite Clauses Memoirs of Niihama National College of Technology Vo.47

Sado,K.(2011b)Finiteness and the Thematic Structure

Konan Eibungaku No.26

Sakamoto,Y.(2009) *Obama Daitoryo Enzetsu* Cosmopier

Thompson, G.(2004) *Introducing Functional Grammar* second edition Arnold

研究ノート

Henry Jamesのプライバシーとパブリシティー

中井 誠一

Henry James が極めて韜晦的な作風の作家であるというのは，周知のことであり，物語の結末や中心的な問題をあえて提示しないため，他の作家に比べて解釈の振れ幅が極めて大きいと同時に，一般読者にとっては作品鑑賞が著しく阻害されてしまっている。またその傾向は James の生涯についてもいえることであり，プライバシーを他人に探られることを嫌い，意図的に事実を秘匿していたこともよく知られていて，例えば，Constance Woolson との間で交わされた書簡を互いの了解の下に焼却処分にしていたことが Leon Edel によって指摘されている。“The Aspern Papers”(1888)では，有名詩人ジェフリー・アスパンの手紙を，あらゆる手段を弄して手に入れようとする編集者（文学研究者）の行動が描かれており，こうしたジャーナリズムによるプライバシーの越境を示すプロットは，James 自らの私生活におけるプライバシー侵犯への不安が窺える典型的な事例である。

もともと James には，ジャーナリズムに対する屈折

した思いがあり，自分の小説を理解しない新聞・雑誌の批評家や編集者に対する憤懣を感じていたし，何よりも，次第に大衆化していく新聞のプライバシー侵害について苦々しい思いを抱いていた。Lyndall Gordon の *A Private Life of Henry James* の冒頭で象徴的に描かれているように，James には，自らの私生活が，後世ジャーナリストによって暴かれるのではないかという不安があって，作品の中で，その影を伴ったテーマや隠れたモチーフが繰り返し現れているのだと推測される。しかし，それは逆に言えば，手段の正当性は置くとして，秘められた「真実」を探り，それを大衆／読者の前に提示し，その成果の如何を問うことが，ジャーナリスト／文学研究者の本質であるということを James が痛切に感じていたということを暗示するものでもある。

こうしたプライバシーとジャーナリズムの問題を真正面から扱った作品に，*The Reverberator* (1888) がある。この物語に登場する新聞記者 George Flack も，やはりプライバシーを蹂躙する否定的なジャーナリストとして捉えられてきた。しかし，実際には，当時のアメリカのメディア事情からすると，それまでの Flack の取材内容に非難されるような性質のものはなく，最大の問題とされる暴露記事にしても，発表した新聞記事の内容は明確にされていないが，一旦「事実」を手にした新聞記者という立場に置かれたとき，それを封じてしまうことがジャーナリズムの本義に背く

ことであることも確かである。

確かに，Jean-Christophe Agnew が“The Consuming Vision of Henry James”の中で，1880年代からの James 作品における大量消費社会の反映を指摘しているように，購読者獲得競争による新聞・雑誌メディアの大衆化が着実に進んでいく時期に世に問われたこの作品でも，記事を「商品」として売る新聞記者 Flack に「アメリカ商人」という消費文化的な印象付けが行われてはいる。ただ，そうした否定的な描写も，*The Bostonians* に登場する Mathias Pardon の悪辣ともいえるジャーナリストの属性や“The Aspern Papers”で描かれた悪質な編集者の行為と比較すると，かなり抑制された性格描写なのである。このように，この作品がジャーナリズムのパブリシティーに対する批判の書だとしても，中心人物である新聞記者 Flack についてのジャーナリストとしての姿勢が相対化されており，彼を批判の的とするには「ゆらぎ」が大きすぎると思われる。

従来の *The Reverberator* 論でもほとんど触れられていないのは，舞台地として設定されていたフランスのメディア事情と階級社会の問題である。実際には19世紀後半のパリのメディアも扇情的ジャーナリズムの温床であった。1875年から翌年にかけて，ニューヨーク『トリビューン』誌に *Parisian Sketches* という20通の書簡を掲載した James がこの現状を知らないわけがなく，この舞台地の設定の意図は，むしろヨー

ロッパの古い階級社会におけるアメリカ人ジャーナリストの実情を浮かびあがらせるためだと考えられるのである。アメリカの民主主義の土壌ではなく，フランスの階級社会におけるジャーナリストの苦境への共感を，自らもヨーロッパ社会におけるアメリカ人文筆家 James が，Flack の中に見出したとしても不思議ではない。また，社交こそが最大の行事であるフランスの貴族社会においては，プライバシーは保護されるものでもあり，同時に開放されるものでもあった。このようなプライバシー境界のゆらぎが，Flack の評価の「ゆらぎ」をさらに大きくしていると考えられるのである。

James は，作家活動の中期から後期にかけて，新聞・雑誌のメディアに関わるテーマや登場人物を取り上げた作品を数多く書いている。従来，James が度々メディア批判を行っていることもあり，*The Reverberator* を含め，ジャーナリズムを扱った作品はほとんどすべてメディアに対して否定的な作品と一括して論じられる傾向にあった。しかし，上述のように，精細に読みなおせば，境界のゆらぎを示す作品もあり，James のプライバシーとパブリシティーのベクトルは一様ではないのである。

今後は，James 作品の中で，新聞・雑誌メディアに関わるテーマや登場人物を扱った作品を抽出し，当時のジャーナリズムやプライバシー概念と対置させ，社会状況や作品の舞台地も鑑みながら，それぞれの物語

の位置づけを再構成してみたい。特に,「プライバシー境界」をキーワードに,James が,それぞれの登場人物をどれほど「境界」を侵す存在として描いているのか読み直しをし,最終的には,そこから James の作家としての現実的な戦略を読み取ってみたいと考えている。

研究ノート

20世紀アメリカ小説にみる同時代貨幣制度との共振

秋元孝文

ここ数年、アメリカ文学における想像力と同時代貨幣制度、とりわけ紙幣制度との関係を研究テーマとしてきました。ともに印刷され、読まれて初めて価値を生じるテクストである文学作品と紙幣は、実はメディアとして類似しており、そこで改めてアメリカの歴史を見るならば、『フランクリン自伝』ではじめて「アメリカ的自己」を描いたとされる「アメリカ文学の父」であるBenjamin Franklinは、印刷屋として植民地紙幣を印刷し、のちには大陸通貨のデザインをした「アメリカ紙幣の父」でもあるという事実にもアメリカにおける文学と紙幣の親和性が読み取れます。意外にも文学作品と紙幣が似ているとするならば、紙幣制度（貨幣制度）が変わっていく際にはその同時代の文学作品にも何かしらパラレルな変化が起こっているのではないか、とくに小説の場合、その想像力においてなんらかの同時代的な変化があるのではないか、というのがこの研究の出発点でした。

こうした発想のもと、これまでは19世紀の作家・作品についての各論をまとめてきました。取り上げた作家、作品としてはBenjamin Franklinの大陸通貨とWilliam Burroughsの肖像が載った地域通貨への考察を始めとして、Horatio Algerの*Ragged Dick*、Herman Melvilleの“Bartleby”、Mark Twainの未完の短編“Which Was the Dream?”、Frank

Baum *The Wonderful Wizard of Oz*、そして21世紀に飛びますがPaul Auster の *The Brooklyn Follies* などです。また贋金アート作家のJ.S.G.Boggs を通してアートの真贋と紙幣の問題についての考察も行いました。アメリカ文学全体を通時的に網羅するのは個人の能力では限界があるため、他にも取り上げたい作家・作品は多数あるものの19世紀にはひとまず区切りをつけ、そろそろ20世紀に視点を移そうしているところです。

現在構想している各論は二つあり、一つ目はJack Londonの死後に出版された *The Assassination Bureau, Ltd.*(1963)という小説です。これはロンドン研究でもほとんど言及されることがない作品なのですが、それもそのはず、まず作品の出自からしてうさんくさい。というのもこの作品のプロットのもとのアイデアは、のちにアメリカ初のノーベル文学賞受賞作家となる若きSinclair Lewisからロンドンが「買った」ものなのです。しかもロンドンは生前この作品を完成することができず、死後に別のミステリー作家Robert L. Fishによって完成されています。作品の著者とはなんなのか、考えさせられます。この著者性の問題を、著者を持たないアートである紙幣と関連づけ、また生前のロンドンが残したメモの結末と実際に完成した作品の結末の違いに、ロンドンが持っていたメルヴィル的なものからFishが用意したポー的なものへの変化を読み込みたいと思っています。

もうひとつはフィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』についてです。消費文化が花開いた1920年代を舞台とする本作はアメリカ文学と経済の関係を語る上で外せない作品ですが、「金のいっぱい詰まった」デイジーの声など、貨幣に関する言及が多く見られることもひとつの特徴です。ヴェブレンの「顕示的消費」の概念なども援用しながら、作品内での貨幣的なはたらきに迫ってみたい。ほかの商品

と違って経年劣化しない貨幣は、唯一時間を味方に付けた商品ですが、この作品では「過去を取り戻す」ギャツビーが描かれ、不可逆的な流れである時間を戻すことができるのかがテーマになります。あまり触れられない点ですが、語り手のニックはいわば他人の借金の貸し主になる権利である「債券」を売る商売につきます。この「債券」もまた時間を養分として貨幣を育てる行為であり、ここでも貨幣と時間の関係が問題になります。こういった点から『ギャツビー』の解釈に新たな光を当ててみたいと思っています。

この二つの各論のあとにはジョセフ・ヘラーの『キャッチ２２』を題材に、自分が立ち上げたシンジゲートの利益のために自軍を無意味に爆撃するというマイローの行為を通して、市場主義的資本主義の矛盾を読むこと、リチャード・パワーズの『舞踏会へ向かう三人の農夫』で触れられるヘンリー・フォードが作ったというフォード通貨を題材に貨幣と国家、そして作品の主題である戦争について考え、プロット上の仕掛けとなっている「複利」についても考察したいと思っています。主人公は発見したフォード貨幣が数十年の時を経て複利によって莫大な財産となっていることを夢想します。貨幣の増殖を加速度的に速めるこの「複利」という思想を検証し、またアメリカ紙幣史において実在した複利付きの紙幣のことも交えながら考察したいと思っています。

研究ノート

Sounds familiar, looks familiar — Examining the Linguistic Correlates of the 'Other Race Effect'

Nigel Duffield

As a theoretical and experimental linguist, I am particularly interested in language variation, especially syntactic variation, and in the ways in which different grammars are mentally represented, and how these are processed and acquired. My research spans a wide range of linguistic areas from purely theoretical-descriptive work on Modern Irish and Vietnamese grammar, to language processing in first and second language acquisition, to investigations of the effects of structural linguistic factors in explaining cross-cultural differences in visual memory and attention. The greater part

of my research, however, is concerned with the nature of what is sometimes called the 'gift for language.' For typically developing children, this gift appears to be universal. For adults, it seems vanishingly rare: at least in predominantly monolingual countries, only very few second language learners achieve native-like performance in their non-native language(s), such that they 'pass for native'. Of course, there are many related linguistic, cognitive and social factors underlying success or failure in this domain. What is reasonably clear from previous studies however, is that intelligence, motivation and perseverance alone do not guarantee success in SLA, nor does extended exposure: for some people it comes easily, for others the situation seems pretty hopeless. We know something about how to measure aptitude (see Skehan 2002, for an excellent overview) yet we don't fully understand what it is.

One important—and keenly debated—question concerning aptitude in SLA is whether it is specific to language, or whether it derives from a more domain-general set of skills. Research planned several years ago, which is

currently being implemented, is designed to probe correlations between non-native sounds (phonological discrimination) and faces (visual discrimination). The starting-point for this line of research is the Own Race Bias (ORB)—also known as the 'Other Race Effect'—as investigated by Kelly *et al* (2005, 2008). The ORB/ORE refers to the fact that people are typically much better at discriminating among faces from their own ethnic group (Meissner & Brigham, 2001, Pedzeket al., 2003; Sangrigoli & de Schonen, 2004a,b). Kelly *et al* (2005) chart the development of ORB and facial preferences during the first few months of life: they conclude that sensitivity to ethnic morphological differences emerges very early, as a result of faces seen within the visual environment; this sensitivity is the precursor of the ORB, which has its onset between 6 and 9 months of age. These studies on facial preference complement other studies by Pascalis *et al* on face discrimination. Both sets of studies support the conclusion that at birth there is no ORB, nor any facilitation for discrimination among own-race faces, but that by 12-13 months, there is evidence of perceptual narrowing, such that non-native faces become much harder to discriminate.

What is striking about this to someone involved in language acquisition is how closely the timing of these developments parallels those in children's speech perception. As the work of Janet Werker and others has clearly demonstrated: at birth children can perceive phonological contrasts in any language; by 6-9 months, most children can only reliably discriminate vowel sounds that are contrastive in their own language(s); by 12-14 months, most children can only perceive native consonantal contrasts. This decline in perceptual skills clearly has a regular and deleterious impact on SLA production such that very few L2 learners are able to lose their 'non-native' accent.

The conjecture underlying the proposed research is that the parallels between facial and phonological discrimination with respect to perceptual narrowing may not be purely coincidental. The project I will carry out in the coming months is concerned to determine whether there are reliable correlations between preserved sensitivity to non-native phonemic contrasts

and preserved discrimination skills with respect to other-race faces (for monolingual, mono-cultural individuals. (Note the assumption here, that the ORB/ORE and reduced phonological discrimination is a property of groups, but not necessarily of individuals: it is expected that some people will do significantly better than others in these discrimination tasks, and that these individuals form a subset of those who make good second language learners).

Currently, I am working to create a battery of discrimination tasks pairing face-recognition and auditory discrimination tasks, to compare reactions to native *vs*. non-native faces and sounds, in a cross-modal, cross-linguistic study comparing English and Japanese children and adults. If successful, the results will yield some further answers to fairly large questions about how special language is, cognitively speaking—see Fodor (1983)—as well as providing a greater understanding of the cognitive prerequisites of the gift for language.

甲南英文学会規約

第１条 名称　本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。

第２条 目的　本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を図ることをその目的とする。

第３条 事業　本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。

1. 研究発表会および講演会
2. 機関誌『甲南英文学』の発行
3. 役員会が必要としたその他の事業

第４条 組織　本会は、つぎの会員を以て組織する。

1. 一般会員
   イ．甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
   ロ．甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
   ハ．上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
2. 名誉会員　本会の発展に著しく貢献した者
3. 賛助会員

第５条 役員　本会に次の役員を置く。会長１名、副会長１名、評議員若干名、会計２名、会計監査２名、大会準備委員長１名、編集委員長１名、幹事２名。

2. 役員の任期は、それぞれ２年とし、重任は妨げない。
3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
4. 評議員は、第４条第１項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
5. 会計、会計監査、大会準備委員長、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。
8. 評議員は、会員の意思を代表する。

9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 大会準備委員長は、大会準備委員会を代表する。
12. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
13. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計　会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間3,000円、学生会員については1,000円とする。

第7条 総会　総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会　第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 大会準備委員会　第3条第1項に定められた事業を企画し実施する。

2. 大会準備委員は、大会準備委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は3名とする。

第10条 編集委員会　第3条第2項に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学から若干名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第11条　顧問　本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。
この規約は、昭和62年5月31日に改訂。
この規約は、平成7年7月1日に改訂。
この規約は、平成11年6月26日に改訂。
この規約は、平成13年6月23日に改訂。
この規約は、平成17年7月3日に改訂。
この規約は、平成21年6月27日に改訂。
この規約は、平成22年7月3日に改訂。
この規約は、平成23年4月1日に改訂。

『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は 1 部プリントアウトして郵送するとともに、Word ファイル形式（.doc）、あるいはリッチテキスト形式（.rtf）の電子データを任意の方法で編集委員長宛に提出する。和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスは 65 ストローク×15 行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
   イ. 和文：ワードプロセッサー（40 字×20 行）で A4 判 15 枚程度
   ロ. 英文：ワードプロセッサー（65 ストローク×25 行、ダブルスペース）で A4 判 20 枚程度
4. 書式上の注意
   イ. 注は原稿の末尾に付ける。
   ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
   ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
   ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 7th ed. (New York: MLA, 2009)（『MLA 英語論文の手引き』第 6 版，北星堂，2005 年）に、英語学の場合 Linguistic Inquiry style sheet (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は 11 月 30 日とする。

甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を1200字（英文の場合は500語）程度にまとめて、プリントアウトしたもの1部を電子データとともに大会準備委員長宛に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割り振りは、大会準備委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、原則として一人30分以内（質疑応答は10分）とする。

ISSN 1883-9924

甲　南　英　文　学　　*No. 28*

平成25年6月21日　印刷
平成25年7月 6 日　発行

—非　売　品—

編集兼発行者　甲　南　英　文　学　会
〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1
甲南大学文学部英語英米文学科気付